

7-2 現地写真（地表調査）

（撮影位置はハザードマップに記載）



P-1
日野川第一発電所水圧管路遠景。



P-2
発電所より鉄管路を望む。



P-3
幅 1m、長さ 5m、深さ 0.3m程度の
古い表層崩壊跡。



P-4
鉄管路北側斜面裾部に発生した表層崩壊の滑落崖。D~CL級粗粒花崗岩が全面に露出する。



P-5
滑落崖より下方を望む。崩壊地下部にはルーズな崩積土が相当量堆積している。



P-6
崩壊地の側方には古い滑落崖や段差地形が存在する。



P-7
擁壁目地に4cmの段差。



P-8
No.3 固定台近くの段差地形。施工時の人工改変による。DL級の強風化花崗岩が露出。



P-9
No.2 固定台付近の小規模な切取部に露出する風化花崗岩 (DM~DH級) 極めて粗粒である。



P-10
No.2 固定台付近の露岩状況。固定台基礎の少なくとも一部は CL 級以上の基盤花崗岩に着岩しているものと推定される。



P-11
長さ約 1.5m、幅 0.5cm 程度のクラック。



P-12
上方より古い崩壊跡地を望む。崩壊の規模は幅 12~15m、長さ 20m+、深さ 1~1.5m 程度。崩壊地内には胸高直径 30cm 程度の杉が植生しており、現状は落ち着いている。



P-13
長さ約 1mにわたり、厚さ 20cm 程
度のコンクリートが破損。



P-14
同上。(分離したコンクリート片)



P-15
擁壁と地山(表土)との間に 1~2cm
の隙間。



P-16
長さ約 15mにわたり、擁壁と地山との間に幅 20cm 程度の隙間が生じている。隙間の深さは最大 80cm。



P-17
同上。(近接写真)



P-18
擁壁同士にも最大幅 5cm 程度の隙間が生じている。



P-19
No.1 固定台東側谷筋の谷頭崩壊跡を側方より望む。
幅 15~20m、長さ 25m+、深さ 0.5~1m程度の規模を持つが、極めて旧く現状では植生が回復している。



P-20
上の写真と同じ崩壊地を上方（固定台付近）より望む。（遷急線の先が崩壊跡地）



P-21
No.1 固定台直下の擁壁と地山（表土）との間に出来た隙間。



P-22
開口幅 2cm、水平方向のずれ幅 2cm
のクラック。



P-23
No.1 固定台と地山との間に生じた隙
間。最大幅約 10cm。



P-24
導水トンネル吐口付近の地山状況。
DH～CL 級粗粒黒雲母花崗岩が露
出。



P-25
No.1 固定台より下方を望む。



P-26
同上。民家屋根のビニールシートが
鳥取西部地震の傷痕。



P-27
P-24 の露頭の近接写真。DH～CL
級の花崗岩が露出。



P-28
導水トンネル通過地点の地表に認められた崩壊地。幅 15m、長さ 7m、深さ 1~2mの規模であるが、発電施設に直接の影響はない。



P-29
P-28 の崩壊地直上部、里道沿いに露岩した基盤花崗岩。CL~CM 級。



P-30
導水トンネル直上部の地表に見られたクラック。長さ 2.5m、開口幅 5cm 程度。



P-31
サージタンクの設置されている 388
m盤、土留擁壁と地山との間に生じ
た最大幅 25cm の隙間。



P-32
388m盤に生じた長さ 10m、開口幅
10cm、段差 30cm 程度のクラック。



P-33
P-32 のクラックの全景。



P-34
同じく 388m 盤（切盛境）に生じた
長さ 6~7m、最大開口幅 40cm、段
差 30cm 程度のクラック。



P-35
P-34 のクラックの近接写真。谷側が
約 30cm ずり落ちている。



P-36
サージタンク山側斜面切取部に露出
する DL~DM 級花崗岩。一部が崩
壊し、サージタンク横に堆積した
いる。



P-37
サージタンク下方の谷筋に見られる
谷頭崩壊跡。現在は植生が進み、一
応落ち着いている。



P-38
388m盤より下方斜面（東側）を望
む。比較的広範囲に崖錐が堆積して
いる。



P-39
この区間の擁壁に顕著な変状は認め
られない。



P-40
擁壁に生じたクラックから連続する
地割れ（クラック）。長さ 5m、開
口幅 10～20cm、段差 20cm 程度。



P-41
巡視路階段と擁壁の間に生じた最大
開口幅 5cm の隙間。



P-42

1ステップ分、下方に乗り上げた巡視路階段。鉄管路下の張コンにもクラックが発生しているが、階段横擁壁の同一位置には顕著な変状は見られない。



P-43

同上。(下方より見上げたアングル)



P-44
鉄管路側方斜面に存在するφ1~2m
の花崗岩。未風化残留礫の転石と思
われる。



P-45
擁壁と地山（表土）との間に最大幅
15cm 程度の隙間が生じている。



P-46
P-45 と同じ区間を斜面下方より望
む。



P-47
No.3 固定台の全景。
顕著な変状は認められない。



P-48
No.3 固定台直下の鉄管路の状況。
顕著な変状は認められない。



P-49
No.3 固定台下方、鉄管路側方斜面に
見られる幅 2m、長さ 2m、深さ 0.3
m程度の古い表層崩壊跡。



P-50
幅 1m、長さ 4m、深さ 0.5m程度の
ガリー状崩壊。(里道沿い)